

大学院生紹介

「知りたい」という原動力

基盤医学コース／神経薬理学分野(平成22年度入学)
木村 生

みなさんは講義中に、あるいは実習中に「ええ〜!？」と驚くようなことがありますか？ 私は学部生時代に薬理学の講義でうつ病の病態仮説のページを開き、衝撃を受けた経験があります。なにしろ、当時の私



は教科書を絶対的知識体系だと思い込んでいたのですから、堂々と「(仮説)」と書いてあることに目を疑ったのです。その後、病院実習において、うつ病は現在の日本では風邪と同じくらい身近な精神疾患となっているが、その病態メカニズムは未だ明らかとなっていないこと。現在出回っている所謂「抗うつ薬」は統計学的にうつ病患者の症状を改善することが分かっているだけで多用されていること。これら“医療現場の限界”を知り、またまた大きな衝撃を受けてしまったのです。

精神疾患の病態メカニズムが解明されていないのはなぜだろう？ この疑問に迫るために現在の研究室に進学しました。研究室での活動を通して、「ヒト以外の動物で精神疾患を模擬した動物、すなわち精神疾患モデル動物を作製するのが困難なこと」がその答えではないかと考えるに至りました。そして、衝動性の研究を通して精神疾患丸ごとの動物モデルではなく、疾患の一側面を捉えた動物モデルの作製に精神医学の活路を見出しています。このような研究職に携わることで、学部学生時代に感じた“医療現場の限界”のコマを先へと進めることができると信じています。

基礎研究は辛い・汚い・地味と三拍子揃った上に、努力が必ずしも報われないということも往々にして起こる領域です。しかし、同時に「知りたい」という欲求を自らの手で満たすことができる、大変魅力的な領域でもあります。独自に得た結果を世界の研究者に提示し、検証を受け、知識体系へと組み込まれていく喜びを、多くの方と共有できる日を心待ちにしています。

研究は、日々面白さを増す

基盤医学コース／免疫学分野(平成22年度入学)
立松 恵

私は、博士課程の1年生として免疫学分野に在籍しています。出身は薬学部ですが、修士課程から現在の研究室に所属して、自然免疫に関わる研究を続けています。修士修了後の進路については色々な選



択肢を考えましたが、もう少し腰を据えて研究に取り組みたいという気持ちから博士課程への進学を決めました。

現在のテーマは、TLR3という自然免疫系の受容体が認識するリガンドの探索・同定で、候補となるサンプルを作製して細胞にかけ、反応をみる、ということを中心にしています。言葉にしてみると単調な作業をしているようですが、実際には、毎回結果をみて次はどういった実験をすべきか考えながら(ほとんど悩みながらと言ってもいいくらいですが)進めており、大変面白さを感じています。

ありがたいことに、研究室には実験設備や機器類が充実しているばかりでなく、頼りになる先生、先輩方がたくさんいます。医師として医療に従事されながら研究をしている方も含め、様々なバックグラウンドを持つ人が在籍しており、幅広いテーマを持っています。同じ自然免疫系といっても、対象とする生命現象やそのアプローチ方法は研究室でもそれぞれ大きく異なっていて、いろいろな実験方法や考え方に触れることができますし、何かやってみようと思った場合にはアドバイスを求めやすい環境にあります。周囲に豊富な経験を持つ研究者がいることは大変心強く、その中で比較的自由に研究をさせてもらっている環境は非常に恵まれたものだと思います。

研究室内に限らずたくさんの方との出会いの中で学ばせていただき、自分の勉強不足に恥じ入ることも多いのですが、少しずつ成長して何かの形で還元できるようにしたいと考えています。私の前後の期も間断なく博士課程に進学しており、大学院の門戸は広く開かれているということを感じます。これからの新しい出会いにも期待して、若い方々の参加を楽しみにしています。